

7月9日 夢

小学6年生の時、卒業文集用に「将来の夢」という作文を書かされた。私はハタと悩んでしまった。夢なんて何一つなかったからである。あれこれ考えたあげく「宇宙飛行士」と書いた。そう書けば大人たちが喜ぶだろうと考えて。冷めた小学生だった。

祖父が亡くなってすぐに私が生まれたので、父は私を祖父の生まれ変わりだと思っていた節がある。自分の名前と祖父の名前を合わせて、「弘市」と名付けた。

生まれてすぐの私を抱いて、父が近所のお寺を参拝したときのこと。偏屈で知られた住職が私の耳を見るなり「この子は医者になる」と予言した。私が物心ついた頃から父はこの話を繰り返し私に言って聞かせた。勉強嫌いの私が医者になんてなれるはずもないのに。

思春期になり、反抗期に入った。とりわけ私の将来に既定の線路を敷こうとする父親に反発するようになった。「医者が無理なら公務員になれ。そのためにはいい大学に入らないと。部活なんて時間の無駄。勉強しなさい。」おかげでさらに勉強嫌いになった。

この頃、あるドラマに触発されて「小学校の先生になりたい」と思うようになった。父は「医者も先生。先生は公務員や。頑張れ。」と私の背を押した。妙な理屈である。

紆余曲折あったが、なんとか高校の教師になった。私は自分の経験から、生徒と進路について話をするとき、心がけてきたことがある。それは、“生徒が語る夢を否定しない”ということだ。歌手になりたい。芸人になりたい。起業したい……。本心からそう思うとき、それは人生の原動力になる。夢は叶わないかもしれない。けれど、そこに向かう努力が人を作る。

「芸人になりたいって……。そうか。君はどことなくカエルに似てるから、それをネタにしたらいい。」20年ほど前、生徒にそんな話をしたことがあった。「愛川さん。あいつ苦労したみたいやけど、やっと新喜劇で役をもらったらしいで。」と、その生徒を担当していた先生から連絡が届いた。

日曜日、テレビを見ていると、その教え子が登場した。「千（せん）を出せ、千を出せ。」私がアドバイスした、カエルのネタだった。

